# マウリッツハイス美術館の思い出

北海道大学医師会
宮の森病院
小笠原正浩（おがさわらまさひろ）

８月21日から９月27日まで大阪中之島美術館でフェルメール《真珠の耳飾りの少女》展が開催された。かの有名な《真珠の耳飾りの少女》が14年ぶりに再来日した。展示期間が約１カ月と短いうえ、今後再び来日する機会がないかもしれないと思われることから、チケットの抽選倍率は非常に高く、入手が大変困難な事態となった。

２年前、ベルギーで開催された学会からの帰途、オランダのハーグ（デン・ハーグ）にあるマウリッツハイス美術館を訪れた。ハーグはアムステルダム中央駅から電車で約50分。国際司法裁判所が置かれていることでも知られる国際都市である。

マウリッツハイス美術館はハーグの中心部、ホフフェイファーと呼ばれる池のほとりに建つ、こぢんまりとした優雅な建物である。もともとは17世紀にヨハン・マウリッツ伯爵の邸宅として建てられたもので、「マウリッツハイス（マウリッツの家）」という名もこれに由来する。周囲には池や緑地が広がり、市民の憩いの場ともなっている。

午前10時の開館前に到着したが、平日だったためか待っている人は数人だけで、ほぼ一番乗りで《真珠の耳飾りの少女》を鑑賞することができた。この絵を見るのは２回目だったが、前回、大混雑の中でわずかな時間しか見ることができなかったのとは大違いである。間近で心ゆくまで鑑賞し、至福のひとときを過ごすことができた。

まず目を引くのは、ラピスラズリを用いた鮮やかな青と黄色のターバン、そして黄褐色の衣装が織りなす色彩の対比である。そこに光を受けて白く輝く大きな真珠が、ぱっと目に飛び込んでくる。少女は横向きの姿勢から顔だけをこちらに向け、大きな瞳で見つめている。わずかに開いた唇は今にも言葉を発しそうで、見る者に何かを語りかけているようにも感じられる。

その神秘的な表情から、この作品は「オランダのモナ・リザ」あるいは「北のモナ・リザ」と呼ばれることもある。しかし、レオナルド・ダ・ヴィンチの《モナ・リザ》が、スフマートによる柔らかな輪郭と繊細な描写、そして気品と奥ゆかしさをたたえた謎めいた表情によって生み出す存在感は、やはり別格である。私にとって《モナ・リザ》が世界最高峰の名画であることに変わりはない。

フェルメールは寡作の画家として知られ、現在、真作と認められている作品はわずか36点ほどである。その中でも《真珠の耳飾りの少女》は最も有名な作品であり、今回の展覧会の目玉となっている。来場者が殺到するのもうなずける。今回の来日は、マウリッツハイス美術館がメンテナンスのため一時休館する時期と重なったことで実現したという。普段はめったに館外に貸し出されない作品だけに、日本で鑑賞できるのは非常に幸運な機会といえるだろう。

マウリッツハイス美術館には、フェルメールの作品がほかに２点所蔵されている。今回《真珠の耳飾りの少女》とともに来日した《ディアナとニンフたち》と、フェルメールが生涯を過ごした街を描いた名作《デルフトの眺望》である。

《デルフトの眺望》には、水辺を隔ててデルフトの街並みが広がっている。画面の大きな部分を空が占め、白や黄土色を帯びた雲が浮かび、その姿が水面にも映し出されている。雲の切れ間から差し込む淡い光が対岸の建物を照らし、壁面や屋根、尖塔を柔らかく浮かび上がらせている。手前には数人の市井の人々が小さく描かれ、画面に遠近感を与えるとともに、平穏な日常と静謐な空気を感じさせる。安定感のある構図で、どことなくノスタルジックな雰囲気を漂わせている。今回この作品は来日しておらず、現地を訪れたからこそ実物を見ることができた。そのことにも、マウリッツハイスを訪れた喜びを感じた。

そして、医師として思いがけず足を止めたのが、レンブラントの《テュルプ博士の解剖学講義》であった。17世紀オランダの医学の一場面を描いた作品で、威厳をもって解剖学を講じるテュルプ博士と、その手元を食い入るように見つめる外科医たちの姿が実に生き生きと描かれている。それぞれの人物の好奇心や緊張感まで伝わってくるようで、400年近く前の一瞬を切り取ったスナップ写真を見ているかのようであった。現代とは医学も医療も大きく異なる時代であるが、「人体を知りたい」という医師の眼差しにはどこか通じるものがあるように思われ、しばし見入ってしまった。

フェルメールの作品は世界各地の美術館や個人コレクションに分散しているため、そのすべてを見るのは容易ではない。私はこれまでに31点を見ることができた。個人蔵を除けば、まだ見ていない作品はあとわずかである。いつか残された作品もすべて自分の目で見てみたいと思っているが、昨今の円安が続く限り、海外の美術館を訪ね歩くのもなかなか容易ではない。円相場が早く以前の水準に戻ってくれることを願いつつ、残されたフェルメールとの出会いを楽しみにしている。

写真１　美術館の外観

写真２　ホフフェイファーから見た美術館